

でかつ インフラ模型

岐阜大学のインフラミュージアムにあるコンクリート橋の模型。いずれも岐阜市柳戸



トンネル・コンクリ橋・鋼橋…岐阜大にミュージアム



トンネルの模型

実物大のトンネルや橋の一部を再現し、模型教材として展示する「インフラミュージアム」を、岐阜大学(岐阜市柳戸)が国内の大学で初めて完成させた。1960〜70年代の高度経済成長長期に造られたインフラ設備の補修・整備が課題となる中、当時の現場を知らない人がその構造を理解する一助になっている。

設置したのは工学部付属インフラマネジメント技術研究センター

高度成長期の設備 構造理解の一助

1. 内閣府の戦略的イノベーション創造プログラムの助成などもあり、大学の東側駐車場の幅約50m、奥行き約15mの敷地を利用して、今夏に完成、一般公開された。現在、トンネル、コンクリート橋、鋼橋の計三つの模型があり、今年度中には新たに盛り土模型も完成予定だ。

トンネルは、輪切り状の断面模型(幅4.5m、奥行き3.5m)を展示した。土圧を矢板で支える「矢板工法」と、吹きつけコンクリートとボルトで支える「NATM工法」の違いを観察することができる。コンクリート橋は全長10〜25mの橋に使われることが多い「PC橋」の一部(幅4.4m、全長15.6m)を設置。鉄筋・ボルトを使った内部構造だけでなく、橋の裏側や、橋を支えるゴム製の部分を直接触ることができる。

センター長の沢田和秀教授(地盤工学)によると、安全な場所です実物大の教材を用いることができるのが利点で、すでに大学院生の課題学習や、土木・建築関連企業の社内研修などに利用されている。複数のインフラ建造物が整う施設は国内の大学にないといい、沢田教授は「身近に実物があるので、すぐ現場に生かせる資料として役立つ」と話している。

(室田賢)